

「福井県遺跡速報 2025」のみどころ

福井県教育庁埋蔵文化財調査センターは、文化財保護法にもとづく埋蔵文化財保護行政の一環として、県内各地で発掘調査を行い、調査成果を『福井県埋蔵文化財調査報告』として毎年刊行しています。

本年においても、3月に5つの遺跡(柿原熊ノ子窯跡、河和田遺跡、小浜城跡、寄安・栗森遺跡、羽賀寺)の調査報告書を刊行しました。これらの報告書の内容から、重要な結果や新たな発見を、「福井県遺跡速報 2025」として、このたび展示いたします。

それぞれの遺跡について、展示資料のみどころを下記にご紹介いたします。

1 柿原熊ノ子窯跡(かきばらくまのこかまあと)

あわら市の北側一帯に広がる坂井北部丘陵地に立地する遺跡です。北陸新幹線建設事業に伴い、平成29(2017)年度に発掘調査がおこなわれました。

調査の結果、奈良時代から平安時代にかけての、須恵器とよばれるうつわを焼いた須恵器窯が4つ、燃料となる木炭をつくるための木炭窯が4つみつかりました。

須恵器の窯で通常燃料となるのは薪なので、木炭窯は付近の鉄生産(製錬炉)に関連すると考えられます。加越台地から北潟湖にかけて展開した古代のコンビナートの一翼を担う遺跡として、周辺の製鉄遺跡や窯跡群を含めた検討が必要です。

また、窯近くの小さな穴には、瓦塔の上部(相輪)が収められていました。瓦塔は、寺院に建てられた塔の形を精巧に模倣したやきものです。古代には、木造の塔のかわりとして、仏教信仰のよりどころとなりました。柿原熊ノ子窯跡の調査で、その製作状況の一端がわかりました。

◆ 柿原熊ノ子窯跡 展示品のみどころ

① 奈良時代から平安時代にかけての須恵器生産を示す資料

須恵器窯の本体や灰原(窯の手前に灰や失敗品を捨てた場所)から、多くの須恵器が出土しました。越前国における奈良時代から平安時代にかけての須恵器生産の様子が分かる、とても重要な資料です。椀(わん)・杯(つき)・甕(かめ)といった多種多様な須恵器がつくられました。

② 瓦塔相輪部分の資料

頂部の相輪を構成する宝珠(ほうじゅ)・水煙(すいえん)・伏鉢(ふくばち)といった部分が出土しました。塔の建物を模した部分と組み合わせて、寺院などに納めたものと考えられます。

相輪部分の出土例は珍しく、木造の塔をモデルに須恵器工人がみ出した秀逸なデザインが必見です。越前国に荘園を有した東大寺など、奈良の寺院の塔がモデルなのかもしれません。



① 柿原熊ノ子窯跡 手前の丘陵中央の矢印下



② 須恵器窯



③ 2号窯から出土した須恵器



④ 5号窯から出土した須恵器



⑤ 瓦塔(相輪部分)

2 河和田遺跡(かわだいせき)

坂井市坂井町の田島川北岸、自然堤防上に立地します。大正時代の耕地整理によって遺跡の一部が削られた結果、加越山地からとれた緑色凝灰岩から古墳時代につくられた石鋤や車輪石の未成品が出土しました。これを上田三平(小浜市出身・福井県史蹟常任委員や文部省史蹟調査嘱託などを歴任)をはじめ全国の研究者が紹介し、とても注目されました。

北陸新幹線建設事業に伴い、平成 29(2017)年度と平成 30(2018)年度に発掘調査がおこなわれました。発掘調査の結果、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての溝や土坑、古代以降の井戸などがみつけられました。これらの遺構からは、多くの土器や石器、そして玉作り関連遺物が出土しました。

◆ 河和田遺跡 展示品のみどころ

① 大正時代の遺跡発見のきっかけとなった耕地整理の痕跡などから多くの遺物を確認

南側の調査区(1区)では、水田の下を掘ると、厚さ 50cmから 1m程度の黄みがかったオリーブ色の土層が現れました。調査の結果、この土層は客土で、その中から多くの遺物が出土しました。遺跡発見のきっかけとなった耕地整理によって人為的に積み重ねられた土層と考えられます。大正時代に発見された遺跡の範囲を推測できる、重要な調査成果です。なお、この時の県内各地の耕地整理によって米収穫高は著しく増加し、県の平均高は百万石をこえました。

また、北側の調査区(2区)からは、下層に弥生時代中期、上層に古墳時代前期の遺物が出土しています。それぞれの層で、穴や土器だまりといった遺構が平面的に確認され、各種の土器などが出土しました。大正時代の研究者は、この状況を、当時の先進的な研究法として欧米の考古学者が紹介する層位学(攪乱がなければ下層から出土する遺物は古く、上層から出土する遺物は新しい)の国内の実例として注目しました。

大正時代、河和田遺跡の発見は、日本において考古学が近代的に発展していくなかで大きな役割を果たしました。今回の発掘調査で、その現場を再び目にすることができたのです。

② 弥生時代中期や古墳時代前期の玉作り関連遺物が出土

また、下層・上層のそれぞれから、緑色凝灰岩(りよくしよくぎょうかいがん)を材料とした玉作りに関連する遺物が出土しました。特に、下層の弥生時代中期中ごろの玉作り関連遺物は、河和田遺跡では初めての発見で、県内でも早い時期の玉作りを示す資料として重要です。

荒割・形割・角柱状未成品・研磨・穿孔といった、各段階の工程の未成品が出土しました。一部には、施溝分割という、石製の玉鋸で擦り切る技法が用いられ、紅簾片岩(こうれんへんがん)製の玉鋸も出土しています。



⑥ 河和田遺跡 大正時代に左奥の水田部分が削られ手前の調査区(1区)に客土が盛られた



⑦ 大正時代の耕地整理による客土(1区) 上から4番目～6番目の黒褐色土層と考えられる



⑧ 土師器出土状態



⑨ 弥生時代中期の土器と玉作関連遺物が出土した土坑

3 小浜城跡(おばまじょうあと)

小浜市の北川・多田川・南川で形成された河口部の三角洲に立地します。慶長6年(1601)、初代小浜藩主京極高次により築城が開始され、後に酒井忠勝によって改修がなされて、近世城郭として完成しました。

一般国道 162 号道路改良事業に伴い、平成 30(2018)年度～令和3(2021)年度に三ノ丸の一部を中心に発掘調査がおこなわれました。調査の結果、三ノ丸外郭の石垣や米蔵の基壇、そして大手門の一部と考えられる遺構などが良好な状態で確認されました。これらは、はじめ作られた京極氏の遺構を破壊して酒井氏の遺構がつくられています。文献記録に残る酒井氏による小浜城の改修の痕跡が実際にわかりました。

◆ 小浜城跡 展示品のみどころ

① 石垣などの三ノ丸関連遺構が語る京極氏・酒井氏の城づくり (パネル展示)

発掘調査の結果、外郭の石垣や大手門遺構、米蔵の基壇といった三ノ丸に関連する遺構を確認しました。

外郭の石垣に用いられた矢穴技法は、近江・大津からの転封により若狭国主となった京極高次によって近江から若狭へ導入されたと考えられます。穴太衆とよばれる、近江の石工集団が持つ技術と考えられ、京極氏の先進性がうかがわれます。

三ノ丸はさらに、武蔵・川越から小浜藩に転封した酒井忠勝によって大幅に修築され、米蔵などが建てられます。今回の調査では、六番から十番の米蔵に関連する遺構を確認しました。大名の威信をかけた城づくりの一端が垣間見えます。

② 瓦が語る近世の技術交流

今回の調査によって、三ノ丸を構成する様々な建物の屋根にふかれた瓦が多数出土しました。越前赤瓦(焼き締めなどの独自製法による硬質の瓦)、いぶし瓦(いぶして炭素膜をつくり耐久性を高めた瓦)といった瓦です。

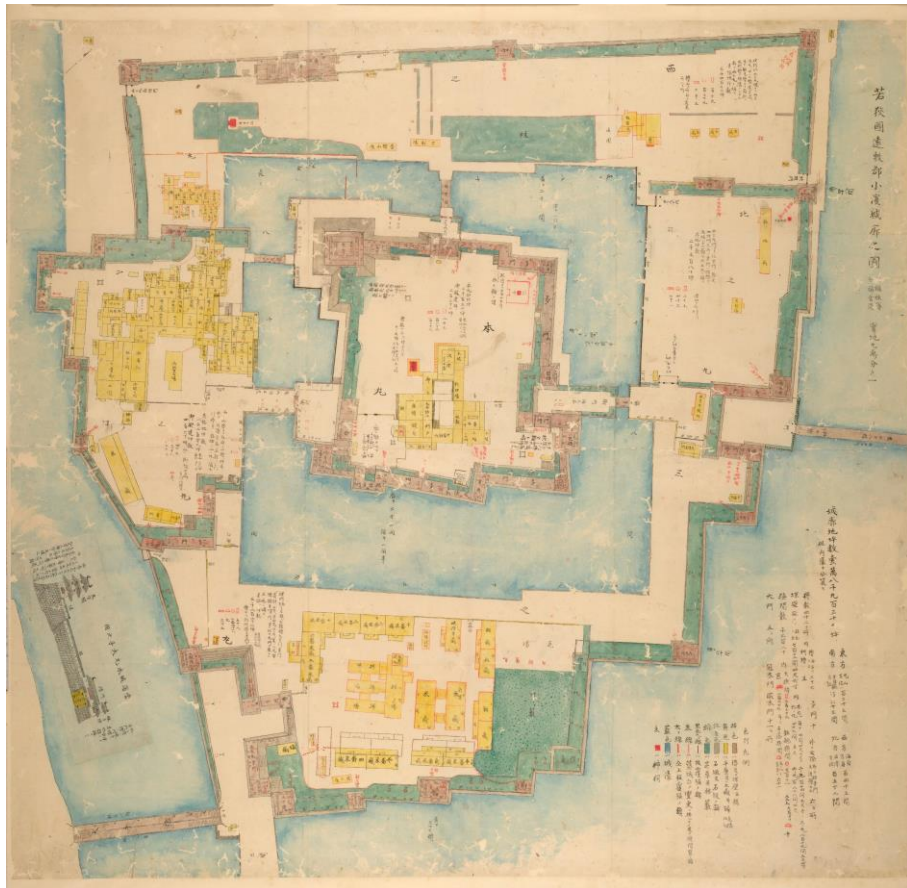
越前赤瓦は越前焼の拠点である越前町平等(たいら)で生産された可能性が高く、最古段階を示すものも含まれます。越前から若狭に多くの赤瓦が運ばれたと考えられます。また、いぶし瓦には、八幡山城(滋賀県近江八幡市)の瓦と似た文様があり、技術交流がうかがわれます。

③ 城づくりにあたっての鉄器加工の痕跡を確認

調査区下層からは鉄の精錬炉が検出され、鉄滓や鞆羽口(ふいごはぐち)が多数出土しました。京極氏による築城の際、現場で鉄製工具や釘などの鉄器加工が行われたと考えられます。



⑩ 小浜城遠景



⑪ 小浜城郭之図(酒井家文庫) (小浜市提供)



⑫ 大手門遺構



⑬ 出土した瓦



⑭ 鉄精錬炉(大鍛冶炉)から出土した鉄滓

4 羽賀寺(はがじ)

小浜市街の北方、内外海半島のつけ根に展開する丘陵の南東側斜面に立地します。行基(貧民救済にも尽くした飛鳥・奈良時代の高僧)が創建したと伝わり、国指定重要文化財の木造十一面観音立像(平安時代)などの多くの文化財を有する、格式高い寺院です。

今回の調査は、通常砂防工事に伴い、令和2(2020)年度から令和3(2021)年度にかけて行いました。本堂に至る参道に面した小規模な谷に残る平坦面などを発掘し、僧房と考える礎石建物や石列、土坑、池状遺構を確認し、中世における羽賀寺の様相が明らかになりました。

◆ 羽賀寺 展示品のみどころ

① 庭園空間と考えられる池状遺構 (パネル展示)

今回の発掘調査で確認された池状遺構は、一部が調査区外のため規模を確定できなかったものの、幅10mほどの不整円形もしくは楕円形をなすものと考えられます。上方の平坦面には、砂利敷や基壇を伴う比較的大型の礎石建物を伴います。また、遺構の脇には出島状の部分が張り出しており、上方の平坦面につながる通路として使われていたと考えられます。

さらに、この遺構には木製暗渠(地中に埋められた導水管)も埋設されていました。念入りの施工がなされており、中世の羽賀寺境内で重要な役割を果たした庭園空間だった可能性を指摘することができます。

② 中世羽賀寺の威容を示す陶磁器・土器・青銅器

発掘調査の結果、遺物量は多くないものの、土師質皿や越前焼、瀬戸美濃焼に加え、青磁の香炉や花瓶、青銅製の小鉢といった陶磁器や青銅器の優品が出土しました。これらの時期は鎌倉時代後半(13世紀末)を上限とし、中心となる時期は室町時代中ごろ(15世紀中葉から16世紀前葉)と考えられます。千数百年続く名刹である羽賀寺の、中世における威容の一端がうかがわれます。



⑮ 青磁碗



⑯ 青銅製小鉢



⑪ 羽賀寺鳥瞰図 （国土地理院発行基盤地図情報及び DEM を用いて作画）

原典:「12 羽賀寺」第37回福井県発掘調査報告会資料



⑫ 北半部第2面全景

5 寄安・栗森遺跡(よりやす・くりもりいせき)

坂井平野の南部、磯部川の自然堤防上に立地します。これまでも隣接地で北陸新幹線建設事業に伴う調査が行われてきました。今回の調査は、一般県道福井森田丸岡線道路改良工事に伴い、令和元(2019)年度及び令和3(2021)年度に行われました。

調査の結果、鎌倉時代後期と室町時代前期の遺構などが確認されました。これらの2時期の遺構は重複しますが、平成 28(2006)年度に確認した屋敷地の端部にあたります。現代の道路の下には中世の溝が並行して確認され、街道沿いの屋敷地であったことがわかります。

◆ 寄安・栗森遺跡 展示品のみどころ

① 中世北陸道沿いのにぎわいを示す遺構 (パネル展示)

上記のように、屋敷地は街道に沿っており、この街道は中世北陸道の一部であったと考えられます。平成28年度の調査結果と合成すると、屋敷地は東西約 60m、南北約 30mの規模の方形の区画で、その中には数棟の掘立柱建物があったと考えられます。街道沿いや屋敷地の周囲には井戸が多数つくられました。街道を旅する多くの人や馬の渴きをいやしたのでしょう。

② 屋敷地の区画溝から出土した一連の土師器皿

屋敷地の西側を区画する溝からは、20数点の土師器皿が出土しました。かわらけとも呼ばれる土師質皿は、儀礼もしくは宴会に使われました。街道からは裏側にあたる溝に、中世の人々はどのような意図で一連の土師質皿を廃棄したのでしょうか。想像がふくらみます。寄安・栗森遺跡からは、このほかにも越前焼・美濃焼・青磁といった各種の中世土器・陶磁器が出土しました。



①⑨ 街道沿いの屋敷地 (東から)